**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４８回　（２０１８年９月１８日）**

**・第４８回の勉強範囲：「第二章　信者たちとともに」２３頁**

*人生の目標は神を愛することである。バクティは唯一不可欠のものである。ギャーナと推理によって神を知ることはこの上もなくむずかしい」*（２３頁上段Ｌ１３～１５）

（解説）

・真理を悟るために一番大事なことは神様に対する愛です。ギャーナ・ヨーガで神様を理解することは難しいです。

・本文の「ギャーナと推理」という言葉は、「ギャーナと識別」が正しい表現です。原文ではギャーナ・ヴィチャールです。

ヴィチャールはここでは前後関係で「識別」が最もふさわしい日本語です。

**＜１＞ギャーナ・ヴィチャール＝ギャーナ（知識）と識別**

**（１）言葉の意味**

・ギャーナ＝永遠/絶対/真理についての知識

・ヴィチャール（ギャーナ・ヴィチャール）＝識別＝実在と非実在とを識別すること

・ヴィヴェーカ＝識別ののち非実在を放棄すること

・ヴェーダーンタ（ギャーナ・ヨーガ）（識別の道）（知識の道）＝はじめに聖典などでギャーナとは何かを学び、ギャーナ・ヴィチャールをしたのち、ヴィヴェーカをして、ギャーナの実体験をすること、その方法を教えるもの

**ヴィチャール（reasoning）の翻訳に関しての補足説明**

・ギャーナ・ヨーガでreasoningは、「推論」と訳すことが多いです。

例えば、「向こうの山に煙が見える。そこには火があるに違いない」「人間はすべて死にます。故にあの人も絶対に死にます」というのは推論ですね。

・ニヤーヤ（理論）哲学では「証明」と訳されることが多いでしょう。

なぜなら、ニヤーヤ哲学には、たくさんのシャブダ・プラマーナ（言葉による証明）があるからです。

**（２）知識と識別で神を悟ることは難しい**

タクールは「知識と識別で神を悟ることは難しい、ヴェーダーンタ哲学を学んで悟ることは難しい」と言いました。特に現代はカリ・ユガです。

サティヤ・ユガ→トレター・ユガ→ドワーパラ・ユガ→カリ・ユガの順に体意識が増えていきます。サティヤ・ユガではサットワの性質がとても多く、体意識が低いですが、カリ・ユガの現代、我々の体意識はとても強いです。体意識が強いと、体意識とは対極にあるギャーナ・ヨーガ（魂意識、純粋な意識の意識）の悟りの道へ至ることは簡単ではありません。

**（３）西洋の人はギャーナ・ヨーガのための準備ができていた**

**・疑問**：**なぜ、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは西洋でヴェーダーンタ、ギャーナ・ヨ　ーガを教えたのでしょう？**

協会出版の『ギャーナ・ヨーガ』を見てください。その内容すべてが西洋でスワーミージーが講じたギャーナ・ヨーガに関する講義の内容です。西洋でのスワーミージーの印象は「ヴェーダーンティ、ギャーニー」です。

**・答え①**：**真理を勉強する準備ができていた**

その当時西洋では世俗的な楽しみを十分に堪能した人達がたくさんいました。その中に、「世俗的な楽しみを思う存分享受しても、その結果として幸せにはなれない。それどころか、心配事や失望もたくさんあるではないか。」、

と、人生について深く考える人びとがいました。

その人びとは、

「どうすれば、安定した幸せを得ることができるのだろう」

「どうすれば、実在について学べるのだろう」

と考えていたので、聖典の勉強をしなくても、

世俗的な楽しみでは本当の幸せにはなれない、ということを体験的に理解していました。

そして、その人びとは

「人生の本当の目的を満足させるには、どうしたらよいのだろうか」

と、進むべき道を模索していました。つまり真理を学ぶ準備ができていたのです。

さらに西洋にはすでにバガヴァッド・ギーターの翻訳があり、インド哲学をある程度理解する土壌が育っていました。のちにインドへ渡ったジョセフィン・マクラウドもその翻訳を読んでいた一人です。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが西洋へと渡ったのは、まさにそのタイミングだったのです。

**答え②：バクティを広める必要がなかった**

西洋では、イエス様という信仰、礼拝の対象がすでにありました。だから、シュリー・ラーマクリシュナを礼拝してください、ということを言う必要はありませんでした。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

Q　&　A

Q：「Mさんは、ときどきタクールに『推理はするな』と言われていましたが、その場合も『識別をするな』という意味ですか？」

Ａ：そうではありません。

例えば、Mさんとタクールが「土でできた神像」について議論をする場面がありますね。その議論の最後にタクールは「なぜそのことでお前が頭を痛めなければならないのか。お前は自分の知識と信仰を求めて努力したほうがよい」と言いました。　つまり、「議論には意味がない」と言っています。ここでは識別のことを言っているのではありません。　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『福音』７頁上段L７～下段L１０）

議論や推論はいろいろできます。例えば、

・私の宗教は正しい。他の宗教は正しいか正しくないか。

・ある人の霊的なレベルはどれくらい高いか

・ヴィシュヌ派の聖典バーガヴァタムと、ヴェーダーンタの聖典ウパニシャッドではこちらが正しいか。どこまで正しいか。

タクールは

「これらのことを議論したからといって、いったい何になるというのでしょうか。

私たちの目的はマンゴー畑でマンゴーを食べることです。マンゴーの木が何本あるか、何の種類のマンゴーの木が植わっているか、を調べることではありません。

人生の目的は、安定した幸せと知識、本当の知識を得ることです。そのことを考えて実践をしてください。

さまざまな聖典、哲学と哲学、宗教と宗教の違いを議論しているうちに、自分が本当にしなければならない実践の時間がなくなります。エネルギーも消費します」

ということを伝えたくて、Mさんに「議論はするな」言いました。

Q：「よくわかりました」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

**＜３＞シュリー・ラーマクリシュナは弟子の生活背景に応じて教えを変えた**

シュリー・ラーマクリシュナは出家弟子と家住弟子に対する教えを厳格に分けました。その理由は、彼らの生活背景の違いです。お母さんが子供の消化力に応じてカレーの調理法を変えるように、弟子の生活背景とその将来に応じて教えを変えました。誤解しないでください。出家弟子を家住弟子よりも愛していた、ということではありません。

**（１）家住弟子にはバクティを教えた（生きている間に幸せになるために）**

**①家住弟子たち**

シュリー・ラーマクリシュナの信者の９９％が家住者でした。年齢は４０代から６０代までの方も多くいました。シュリー・ラーマクリシュナの有名な家住弟子を数名紹介します。

・**Mさん**：『福音』を書いたMさんは家族の問題を抱えており、自殺したいとまで考えていた時にシュリー・ラーマクリシュナに出会いました。彼は学校の校長だったので仕事もたくさんありました。

・**ラーム・チャンドラ・ダッタ**：彼は３人の子供を亡くす、という深い悲しみを味わいました。シュリー・ラーマクリシュナは彼のことを「ラーム、ラーム」と親しみを込めて呼び、彼の家を何度も尋ねるくらい親しい信者でした。

・**ケシャブ・チャンドラ・セン**：有名な宗教（ブラーフモー・サマージ）のリーダーで学者のケシャブ・チャンドラ・センはたくさんの講演をおこないました。とても面白い講演でしたが、自分が悟っていなかったので、人びとに本当の幸せを与えることはできませんでした。

**②家住弟子たちは「幸せになりたい」からシュリー・ラーマクリシュナを訪れた**

彼らは真の霊性の指導者を探し、そしてシュリー・ラーマクリシュナのもとを訪れるようになりました。

家住者がシュリー・ラーマクリシュナを訪れた動機は「幸せになりたい」からです。

当時のインド人の寿命は５０，６０歳くらいでしたので、年配の家住者にとっては、人生の残り時間が少ない。にもかかわらず、彼らは仕事や義務に忙しく、霊的な実践が十分にできず、放棄することもできなかった。年を重ねたぶん、苦しみや悲しみもたくさん味わってきました。

シュリー・ラーマクリシュナは、家住弟子が生きている間に、どうすれば幸せになれるかを考えて、彼らにバクティ・ヨーガを教えました。そしてカルマ・ヨーガを少しだけ。ラージャ・ヨーガもヴェーダーンタも教えませんでした。

**③2種類のバクティ**

**・アパラー・バクティ**

神様のことをちょっとキールタンをする、ジャパをする、賛歌を歌う、儀式をする、バクティの聖典を勉強する。そして、神様の名まえを聞くと涙が出る、踊りだす。

これがバクティのイメージですね。これらはすべてアパラー・バクティです。

**・パラー・バクティ（神と信者がひとつの存在になる）**

パラー・バクティでは、神様と私、バガヴァーンとバクタが同じ存在です。それがバクティ・ヨーガの非二元論です。

クリシュナの最高の信者であるラーダーが「私はクリシュナです」と言っていました。それが、マドゥラ・バーヴァ（神様を恋人のように愛する）の最高の状態です。「私はクリシュナで、別の存在がなくなる、神様と私が一つになる」それが本当のパラー・バクティです。

**④「識別して一時的なものに執着しない」ことも家住弟子への教えのひとつ**

シュリー・ラーマクリシュナは家住者に対して、「執着をしないでください」と教えました。　「執着はまるで穴のようです。せっかく水をためようと思ってもその穴から出て行ってしまいます。だから、家族も一時的なものだと識別し、家族に執着しないように」と教えました。時々ヴェーダーンタのことも教えましたが、家住者には、バクティ、バクティ、バクティを教えました。なぜなら、ブラフマンだけが実在ということを家住者に教えると、仕事ができなくなりますから。

これで、シュリー・ラーマクリシュナが『福音』の中で「ギャーナ・ヨーガでの悟りは難しい。バクティが大事です」と言ったのは、家住弟子を助けるためということが分かりましたね。

**（２）のちの出家直弟子にはヴェーダーンタも教えた**

**①シュリー・ラーマクリシュナは将来のことが分かった**

シュリー・ラーマクリシュナは、知っていました。

ナレン、バブラム、ラカル、シャシー、シャラト、ハリ、彼ら若者が将来シュリー・ラーマクリシュナの教えを広めるということを。それで彼らには特別なトレーニングを施しました。家住者には教えなかったヴェーダーンタ（ギャーナ・ヨーガ）も教えました。

**②のちの出家直弟子は「真理が知りたい」から、シュリー・ラーマクリシュナを訪れた**

彼らは当時まだ若く、ほとんどが学生でした。彼らは養うべき家族や仕事もありませんでした。若者がシュリー・ラーマクリシュナのもとを訪れた動機は、「真理の勉強がしたい、純粋な愛、知識、実在について知りたいから」です。

そして彼らは熱心に修行に励みました。　家住弟子の中にもヴェーダーンタが好きな人（プラーノクリシュナ）がいましたが、実践のレベルが違いました。

のちに出家をしたハリ（トゥリヤーナンダジ）の実践の真剣さを考えてください。彼は、ガンジス川にワニが出ても「私はアートマンです。アートマンは永遠です。それなのにワニから逃げるのは矛盾ではないだろうか」と考え、再びワニのいるガンジス川に入って行くほどの実践をしていました。

**③信者の混乱を避けるため、シュリー・ラーマクリシュナは教える際に細心の注意を払った**

シュリー・ラーマクリシュナがのちの出家直弟子に教えるときは、他の家住者の弟子に内容が聞かれないように、部屋の扉を閉めました。なぜなら、家住弟子がヴェーダーンタの教えを聞くと、とても混乱をするからです。将来の出家直弟子が仕事をすることにも反対しました。なぜなら、シュリー・ラーマクリシュナは、彼らがトレーニングを受けた後、出家をして一般の人にシュリー・ラーマクリシュナの教えを広めることを知っていたからです。

ナレン（のちのスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）はその中でも一番の責任を担う人でした。ナレンは特別な教えを施され、その内容は他の出家直弟子にも伝えられることはありませんでした。

・📖 （読む）「師と弟子」２３頁上段Ｌ１７～下段L１１

*カーリーが何であられるか、誰が理解ができるだろう。*

*六派哲学さえ、を示す力はない……*

*師はまたおっしゃった、「人生の唯一の目標は神への愛、ブリンダーバンの乳しぼりのたちや、牧人や牧童たちがクリシュナに対して抱いた愛を養うことだ。クリシュナがマトゥラーに行ってしまったとき、牛飼いたちはとの別れを悲しんで激しく泣きながらさまよい歩いた」*

*こう言うと、師は目を上向けておうたいになった。*

*たったいま、私は子牛を抱いた若い牛飼いを見た。*

*彼はそこに、若木の枝をつかんで立っていた。*

*「あなたはどこにいる、兄弟カーナーイ！」と彼は叫んだ。*

*しかし「カーナーイ」と言えず「カ」で声は消えた。*

*「あなたはどこにいる」と叫ぶと、*

*彼の目には涙がれた。*

*愛に満ちた師のこの歌をきくと、Mも涙を催した。*

（解説）

**＜４＞シュリー・ラーマクリシュナが歌った賛歌**

**（１）マザー・カーリーへの賛歌**

「カーリーが何であられるか、誰が理解ができるだろう」という歌は３７、３８頁を見てください。作者はラーム・プラサードで、ときどきプラサードとだけ書かれています。

*マザー・カーリーの本性はさまざまな哲学を勉強しても理解できない。*

*マザー・カーリーの本性は、シヴァ神だけが理解しています。他の人にはわからない。*

*ヨーギーはマザー・カーリーの本性を理解するためにいつも瞑想、チャクラの瞑想をする。*

*果てのない海を泳ぎ渡りたいが無理なように、小人が月に触れたくても無理なように。*

それがこの歌の内容です。

**①マザー・カーリーを愛する**

この歌の内容が示すように、マザー・カーリーの本性を理解することは難しいです。ラーム・プラサードはみんなにマザー・カーリーの本性を理解してほしいが、無理だと言っています。

マザー・カーリーの本性を理解することと、ブラフマンの本性を理解することは同じです。どちらも難しいです。

だから、大事なことはマザー・カーリーを愛することです。

「マザー・カーリー（神様）の本性を理解したいので、マザー・カーリーを愛してみよう」と、考える必要はありません。ただ神様を愛するだけでいいです。愛する目的を決めなくてもいいです。

**②恩寵でのみマザー・カーリーの本性を理解できる**

マザー・カーリーご自身が、その信者に対して「自分の本性を教えよう」と思ったときだけ、我々はマザー・カーリーの恩寵でその本性を理解することができます。

『福音』の中に召使いが彼の主人と同じ席に着きたくても、召使いの意志ではかなわないが、その主人が召使いを愛し「一緒に座りましょう」と言ったときだけ、同じ席に着くことができる、というエピソードがあります。

それと同じことです。我々はマザー・カーリーを愛します。神様を愛します。そしてマザー・カーリーの恩寵があるときだけ、その本性を理解することができるのです。

**（２）クリシュナ神への賛歌**

「たったいま、私は子牛を抱いた若い牛飼いを見た」という歌は、クリシュナ神への賛歌です。クリシュナ神がブリンダーバンを去り、マトゥラーに行くときに、友達である牛飼いたちが泣きながらクリシュナ神を呼ぶ歌です。これは芝居の中の歌です。昔インドの田舎には、旅芸人がやってきて芝居をしました。マハーバーラタやラーマーヤナ、クリシュナ神の物語などを演じ、人びとはそれを見るために集まりました。シュリー・ラーマクリシュナは子供のころ、そのたぐいの芝居をたくさん観て、その中の歌やセリフをたくさん覚えました。

・📖 （読む）「師と弟子」２３頁下段L１２

*一八八二年四月二日*

（解説）

１８８２年４月２日の記述の冒頭部分はベンガル語の原書では、英語版、日本語版の４月９日の記述である「プラーノクリシュナ・ムケルジーの家に行くこと」が記されています。英語版を翻訳したニキラーナンダジが日付を間違えたのかもしれません。

また、英語版では、原文の１８８２年４月２日の記述の約４頁程度がカットされています。日本語版は英語版から翻訳しましたので、日本語版もカットされています。その中の大事な部分の内容を言います。

**＜５＞日本語版ではカットされている部分の大まかな内容**

*〇シュリー・ラーマクリシュナは神様を好きな人がいると聞いては、さまざまな神の信者のもとに会いに行った。ふつう宗教家はプライドがあるので、招待されなければ他の宗教のリーダーには会いに行くことはないが、シュリー・ラーマクリシュナにはエゴが少しもなかったので、神様の偉大な信者を探してあちらこちらにモトゥル・モハンに頼んでつれて行ってもらったのだ。*

*〇デヴェンドラナート・タゴール（ラビンドラナート・タゴールの父）や、イーシュワラ・チャンドラ・ヴィッディヤ―・シャーゴルのところにも行った。*

*〇ある時、シュリー・ラーマクリシュナはモトゥル・モハンと一緒に（ジョラサンコにある）デヴェンドラナート・タゴールのブラフモー・サマージを訪れた。当時ケシャブ・チャンドラ・センは青年だった。シュリー・ラーマクリシュナは、そこにいた人達の中で、ケシャブ・チャンドラ・センの瞑想はとても深いことを理解した。シュリー・ラーマクリシュナがケシャブ・チャンドラ・センを初めて見た時のことである。　☞（『福音』７９７頁下段L１～L５）*

*〇ドッキネッショルとカルカッタの間には、canal（運河、水路）がある。そこには橋が架かっており、その橋の下に神様の偉大な信者が住んでいると聞いて、シュリー・ラーマクリシュナはモトゥルにつれて行ってくれるように頼んだ。モトゥルはたいそうお金持ちだったので立派な馬車でその人のところに行き、その家の人々を驚かせた。その日、そこでは結婚式が行われていた。シュリー・ラーマクリシュナは神様の偉大な信者にあいさつをするために家のなかに入って行き、「そこは女性の部屋なので入らないでください」と言われても構わず奥に進んだ。モトゥルはお金持ちでプライドもあったので、シュリー・ラーマクリシュナの態度をとても恥ずかしい思い、帰りにシュリー・ラーマクリシュナに、「お父さん、もう私はこれからあなたと一緒には行きません」と言った。*

*〇シュリー・ラーマクリシュナが実際にケシャブ・チャンドラ・センと会話を交わしたのは、ベルゴリアの（ジョエゴパル・シェンの）別荘だった。シュリー・ラーマクリシュナはケシャブがベルゴリアに来ていると聞いたので、会うために甥のフリダイと出向いたのだ。当時ケシャブはデヴェンドラナート・タゴールのグループ（ブラフモー・サマージ）をやめて自分のグループ（インド・ブラーフモー・サマージ）を作っていた。ケシャブとその信者たちはベルゴリアの庭の池のほとりに座っていた。*

*甥のフリダイは「私の叔父は神様のことが大好きです。あなたも神様の偉大な信者だと聞いて、挨拶をするためにきました」と言った。シュリー・ラーマクリシュナはケシャブ・チャンドラ・センを見て「あなたはカエルです」と言ったので、信者たちは怒りだした。ケシャブ・チャンドラ・センは信者たちを制して、「この方の言うことを最後まで聞きましょう」と言い、シュリー・ラーマクリシュナは、「あなたはすでにしっぽを落としている。あなたはカエルのように、水中でも陸上でも生きることができる」と続けた。*

*それでも信者たちはその意味が「あなたは家住者から離れてお坊さんになっても家住者と一緒に暮らしてもどちらでも霊的な実践ができる」ということだとは理解できなかった。*

*シュリー・ラーマクリシュナがさらに神様について深い話をしたので、そこにいた人達は驚いた。ケシャブ・チャンドラ・センはとても感動し、それ以来、ドッキネッショルに通い始めた。*そこにいた一人の人が、その日の出来事の回想録を書いた。

☞（『福音』４８６頁下段L１３～２１、『ラーマクリシュナの生涯』上巻３７７頁L３～３７８頁参照）

*〇ブラフモー・サマージは形のない神様を信仰しており、形のある神様を認めていなかった。そこでシュリー・ラーマクリシュナは言った。「形のある神を信じなくても構わない。しかし、神へのあこがれ、神を愛することは大事なのだ。*

*ブラフモー・サマージはフルートの穴を一つしか使っていないが、ヒンドゥ教徒はフルートのさまざまなメロディを奏でる。ヴィシュヌ派、シャーンタ、ダーシャ、サッキャ、ヴァーッツアリア、マドゥラ、というように神へのさまざまな態度で実践できるのだ」*

☞（『福音』１１１８頁上段L５～L１８参照、１１１９下段頁L１～１６参照）

*〇形のある神を好きな人は、神を「私のお母さん」と感情を込めて呼んでいる。しかし、形のある神を信じていない信者は、神と自分の関係を人間関係のようなイメージが抱けないので、ドライになる。だから、ヒンドゥ教徒の感情を見習うように。神の形を信じなくてもいいが、感情をこめて祈るように。*

〇*金持ちの家に仕える召使いのように、生きていなさい。彼女は主人の子供を育てる時には「私のハリ」と呼ぶが、心はいつも故郷の自分の子供のことを思っている。*

☞（『福音』５６９頁下段L１６～５７０頁上段L４参照

（解説）

その話の意味は、神様との関係だけが永遠。召使いと主人の子供の関係は一時的であるように、我々と我々の奥さん、子供、親戚との関係は一時的だということです。

*〇シュリー・ラーマクリシュナはケシャブ・チャンドラ・センに言った。「あなたは皆さんを教えているが、結果が出ていない。なぜならあなたは神を悟らずに教えているからだ。そしてあなたには教師というエゴがある。あなたは自分自身の実践が足りないのでもっと実践するように」*

*そのように、シュリー・ラーマクリシュナはケシャブ・チャンドラ・センを導いた。*

〇*シュリー・ラーマクリシュナがケシャブ・チャンドラ・センのグループに会うと、一緒に歌い、神様の話をし、踊った。そしてシュリー・ラーマクリシュナは時々「一緒に唱えましょう」言った。*

*「ブラフモー、アートマー、バガヴァーン」　（ブラフマン、魂、形のある神）*

*「ブラフモー、マーヤー、ジーヴァジャガット」（ブラフマン、霊的な幻、個人的求道者）*

*「バーガヴァタム、バクタ、バガヴァーン」（聖典、信者、神）*

*「グル、クリシュナ、ヴァイシュナヴァ」（グル、主なる神、ヴィシュヌ派の信者）*

*ケシャブ・チャンドラ・センは笑いながら、「『グル、クリシュナ、ヴァイシュナヴァ』は、今ここでは言わないほうがいいです」と言った。*

☞（『福音』４１９頁下段L１９～４２０頁上段L１５参照）

（解説）

これらの言葉はまるでマントラのようですね。これらは本当に大事な言葉です。大事な言葉を声に出して唱えると、唱えた人の心にその言葉の印象が深まるので、シュリー・ラーマクリシュナは、「一緒に唱えましょう」と言ったのです。

*〇シュリー・ラーマクリシュナの信者がケシャブ・チャンドラ・センのもとを訪れて尋ねた、「あなたのシュリー・ラーマクリシュナの印象は何でしょうか？」*

*ケシャブ・チャンドラ・センは答えた。*

*ドッキネッショルのパラマハンサはふつうの人ではありません。*

*今、この世の中に彼のような偉大な人は存在しません。*

*とても素晴らしい方です。*

*とても特別な方です。*

*最大の注意を払って、その方の面倒を見るべきです。*

*そうでないと、その方の体がなくなる可能性があります。*

（解説）

ケシャブ・チャンドラ・センは、高級なガラス製品には触れるべきではないように、シュリー・ラーマクリシュナに対しても最大の注意を払って接してください、と言いました。

この部分は英語にはないかもしれません。

（第48回『福音』勉強会以上）